

中広：ジャン＝ポール・サルトルに関する病跡学的試論
 ——いわゆる「メスカリン事件」をめぐって自己愛の視点から——

ジャン＝ポール・サルトルに関する病跡学的試論

——いわゆる「メスカリン事件」をめぐって自己愛の視点から——

中 広 全 延

1. はじめに

本研究はジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre) に関する病跡学的研究の試みである。筆者はこれまで指揮者のセルジュ・チェリビダッケ^[1,2]、カルロス・クライバー^[2]、小澤征爾^[3]、ヘルベルト・フォン・カラヤン^[4,5,6]に関して病跡学的研究を行ってきた。彼らは傑出した指揮者であり特殊な職業にある人たちといえるが、彼らの病跡は現代の精神の病理を考える上で参考となる。一般に病跡学的研究は、単に過去の人物を診断することではなく、そのような意義を有する。特にカラヤンについては自己愛の視点から論じた。現在日本ではいわゆる「自己愛傷付き型うつ病」と称される病態が蔓延しているが、自己愛は現代日本の精神病理におけるキーワードとなっている^[7]。サルトルに関して、彼の自己愛をめぐって病跡学的考察を発表してきた^[8,9,10]。ゆえにサルトルに関する研究は、自己愛を考察の中心におくという点で、カラヤンの病跡学的研究の延長線上にあるといえる。

サルトルを自己愛の視点から論じた研究は、調べた限りでは、残念ながら皆無である。ここではいわゆるサルトルの「メスカリン事件」をめぐって、それが彼の自己愛とどのように関係するか検討し、その現代日本の状況に通じる精神病理を解き明かしてみたい。よってサルトルの病跡学的研究といっても、彼が生まれてから死ぬまでの全生涯、あるいは非常に広範囲にわたる活動のすべてをカバーはしない。自己愛から見た彼をめぐる状況の分析である。

まず簡単に紹介しておこう。サルトルは、哲学者、小説家、劇作家、および評論家として活躍した全体的知識人である。代表作に、哲学的名著『存在と無』、小説『嘔吐』、戯曲『出口なし』、評論『聖ジュネ』などがある。世間一般には、行動する知識人として広く知られた。第二次世界大戦後から1960年代にかけて、神のごとき栄光に包まれ、母国のフランスだけでなく世界中で、絶大な影響力を行使した。1964年ノーベル文学賞を辞退し話題を呼び、1966年には生涯の伴侶であるシモーヌ・ド・ボーヴォワール (Simone de Beauvoir) と来日した。その頃が彼 (と彼女) の絶頂期だったように思われる。その1966年はミシェル・フーコー (Michel Foucault) の『言葉と物』が出版され、この手の難解な本としては、爆発的に売れた。知の流行は移り変わり、サルトルは状況に追い越されていく。死後評価が下落し、現在多様な評価が存在するが、影響力および知名度という点で、20世紀における最も重要な知識人、哲学者、小

説家、評論家のひとりといってよからう。

2. メスカリン事件

サルトルは、想像力に関する彼の研究の一環として幻覚剤メスカリンの注射を受けたところ、長期間にわたって幻覚に悩まされ続けた、とされる。いわゆるサルトルの「メスカリン事件」である。

これに関して、サルトル自身も触れているが、ポーヴォワールの著作のほうがまとまった記述がある。彼は、自分のことをあまり系統的に書いていない。ポーヴォワールが、サルトルについて多く書いている。彼女の一連の自伝のひとつ『女ざかり』^[11]から引用しよう。

「二月（1935年2月：筆者註）に、彼の旧友のひとり、ラガッシュ博士が、パリのサン＝タンヌ精神病院に来て、メスカリンの注射をやってみないかとすすめた。この麻薬は幻覚を起こす特性があるから、サルトルは自分でその現象を体験できるだろうというのだった。ラガッシュは、あまり気持のよい冒険ではあるまいが、危険は皆無だと教えてくれた。サルトルはせいぜい数時間のあいだ「奇妙な言動」を呈するだけですむはずだった」

「彼は薄暗い病室のベッドに寝かされたのだそうだ。幻覚はなかったが、見る物が気味悪く変形した。（この翻訳の文章は矛盾する。原文は、「ベッドに寝かされた」とき「幻覚はなかったが」それから「見る物が気味悪く変形した」、と読めるか：筆者註）雨傘が禿鷹に、靴が骸骨になり、人の顔は化け物のようになった。そして体の両脇といわず背後といわず、蟹だの蛸だの、奇妙なものが、うようよと這いまわった」

サルトルのエビ・カニ嫌いは有名である。彼は甲殻類を、この世のものならぬ「別世界のもの」「別の宇宙から盗んできたのだ」と言っている。

幻覚は病院からの帰り、列車の中でも続いた。

「汽車の中でも黙りがちだった。その日私のはいていた靴はとかげの革で、紐の先が総のようになっていた。彼はそれが巨大な黄金虫に変わるのを、今か今かと見守っているのだった。また、おそらく車輻の屋根に足をひっかけているらしい一匹のオラウータンがさかさに吊りさがって、窓ガラスに不気味な顔を押しつけているのが見えたという」

これ以後、本来快活なサルトルがふさぎこむようになる。

「つぎに会った時、彼はその訳を私に話してくれた。数日前から、彼は時々ひどい不安に襲われていたのだった。彼が陥る状態は、メスカリンのために落ち込んだ状態を思い出させたので、彼はおびえているのだ。……いつかは、自分のうしろから伊勢エビがひょこひょこついてくると、本気で思い込むかも知れない」

ポーヴォワールによると「医師たちは、メスカリンがこの症状の原因になったはずは絶対にない、と断言している」とのことである。そのとおりであろう。メスカリンが代謝されて体外

中広：ジャン＝ポール・サルトルに関する病跡学的試論
 ——いわゆる「メスカリン事件」をめぐる自己愛の視点から——

に排出されれば幻覚は消失すると考えられる。帰り道、列車の窓ガラスにオラウータンが見えたのは、メスカリンがまだ少し体内に残っていたせいかもしれない。メスカリンの効果は「せいぜい数時間のあいだ」とはかぎらずそれ以上続く可能性はあるが、それが長期間持続するとは考えにくい。しかし、サルトルは甲殻類の襲撃におびえ続けることになる。これはどう説明されるべきか。

3. フラッシュバック

幻覚剤が体内からなくなれば幻覚は消失するが、幻覚剤使用時の体験が幻覚剤なしでも再現することがある。DSM-IV-TR^[12]では幻覚剤持続性知覚障害（フラッシュバック）[292.89 Hallucinogen Persisting Perception Disorder (Flashbacks)]が、それにあたる。「幻覚剤持続性知覚障害（フラッシュバック）の基本的特徴は、以前の1回以上の幻覚剤中毒の間に体験した知覚障害が再現する、一過性で繰り返す知覚の障害である」とされる。再現し繰り返す知覚障害は、サルトルの場合、伊勢エビの幻覚ということになろう。こういう状態が起こらないことはない。

しかしDSMを厳格に適用すると、診断は幻覚剤持続性知覚障害とは別のものになる。幻覚剤持続性知覚障害の項のテキスト（診断基準の前についている説明文）に「一方、もしその人が知覚障害の病因に関して妄想的解釈をするならば、適切な診断は特定不能の精神病性障害となるだろう」と記されている。つまり幻覚剤持続性知覚障害と診断するには、その人が知覚障害の原因は幻覚剤だと認識できていないといけないのである。サルトルは自分の症状を「僕にはこれがなんだか解っている。慢性幻覚性精神症（原文は *psychose hallucinatoire chronique*）になりかかっているんだ」とポーヴォワールに語った、と『女ざかり』にある。彼は病因に関して、幻覚剤メスカリンによるとはせず“*psychose hallucinatoire chronique*”と言う。これを妄想的解釈とするならば、診断は「特定不能の精神病性障害」となる。

DSMと関係なく、サルトルの異常を、メスカリンの後遺症、幻覚のフラッシュバック(DSMの病名ではなく、英語の辞書に出ている「flash back＝〈記憶などが〉突然過去に戻る」という意味で)とするのが従来の定説だった^[13]。

ところがサルトルにメスカリンの実験を行ったラガッシュ博士たちは、「メスカリンがこの症状の原因になったはずは絶対はない、と断言している」。ポーヴォワールもフラッシュバック説をとらず、次のように分析している。

「サン＝タンヌ病院での実験は、サルトルにいくつかの幻覚症の型を提供しただけだった。ふたたび当時の恐怖がよみがえったのは、おそらく彼の哲学的労作から生じた疲労と緊張のためと思われた。後になって私たちは、こうした恐怖が、深刻な不安のあらわれだったのだと考えるようになった。サルトルは「分別ざかり」、「壮年期」に入ることに耐えられなかったので

ある」

サルトルの症状を「幻覚」とせず「恐怖」としていることが注目される。ポーヴォワールへの評価もサルトルと並行して下降線をたどっているかもしれないが、長年連れ添ってきただけに鋭く的確な分析をしている。

ラガッシュ博士は名の通った精神科医だが、なぜ自信を持ってフラッシュバック説を否定するのだろうか。おそらくそれまでにサルトルのような例がなかったからではないか。もしあったとしたらメスカリンの実験は危険ということになり、彼に勧めるはずがない。論理的には、サルトルがフラッシュバックの症例の第一号である可能性は存在する。自験例（自分が経験した症例）のない疾患や症状は極めて珍しい、と思ってしまうのが医者一般的な心理かもしれない。以上は筆者の推察で、ラガッシュ博士はその主張の根拠を示していない（ポーヴォワールが書き残していない）。

ここではひとつの試みとして、従来からの定説であるメスカリン・フラッシュバック説（幻覚がフラッシュバックしたとする説）以外の可能性、ラガッシュとポーヴォワールの主張に沿った仮説（ラガッシュ・ポーヴォワール説と呼んでおこう）の可能性を探ってみたい。そのためには、サルトルの人となり、それから当時彼のおかれていた状況を知る必要がある。

4. シュヴァイツァー

サルトルは、1905年パリに生まれた。生後一年足らずで父親を亡くし、パリ近郊にある母親の実家で祖父母と母親とで暮らすようになる。ちなみに彼は、アフリカでめぐまれない人々の医療に生涯を捧げノーベル平和賞も受賞したあの有名なアルベルト・シュバイツァー（Albert Schweitzer）の親戚にあたる。アルベルト・シュバイツァー博士の父親の実兄が、母方の祖父シャルル・シュヴァイツァーである。シャルル・シュヴァイツァーは、アルザス地方出身でドイツ語教師として成功し、比較的裕福な知識人階級に属していた。サルトルが書物と学問、知の世界に親しむ環境を用意し、少なからぬ影響を与えた人物である。このあたりの事情は、サルトルの自伝的作品『言葉』^[14]に詳しい。

その『言葉』から、祖父シャルルのエピソードをひとつ紹介する。

「祖父はアンリ・ベルグソンと一緒にジュネーブの湖をわたったことがあった。その時のことを彼はよく話した。「わたしは感激のあまり有頂天になっていた。雪に輝く山々の峰に見とれたり、水面のきらめきを目で追うのに忙しくて、目が二つあるだけでは足りないほどだった。ところがベルグソンときたら、トランクの上に腰かけたまま、じっと足の間に視線を落としたきりなのさ。』」

もしアンリ・ベルグソンが何者か知らなければ、発言の意図がまったく理解できない。ベルグソンは当時一世を風靡した大哲学者であり、要するにこれは自慢話なのだ。その自慢話を「彼

中広：ジャン＝ポール・サルトルに関する病跡学的試論
 ——いわゆる「メスカリン事件」をめぐる自己愛の視点から——

はよく話した」のである。

上記はほんの一例で、他にもシャルルの自己愛を示す記述がある。精神科医で病跡学者の高橋正雄も、論文「偉大なる祖父（第11報）サルトル」^[15]でシャルルの自己愛的側面を指摘している。

祖父はサルトルを溺愛した。再び『言葉』から引用する。

「シャルルは……、私という現世のすばらしい作品に、うっとり見とれていたのだ」

「祖父の溺愛によって自惚れきっていた私は、……」

「皆が夢中になって私を愛するからには、私はすばらしい人間なのだ」

このように祖父と周囲は、サルトルに自己愛を植え付け育てた。

しかし、1917年母親の再婚により状況は一変する。パリの祖父母から離れ、彼は母親とともに西フランスの港町ラ・ロシェルに移る。

5. 無賃乗車感覚

『言葉』は自伝といっても、ラ・ロシェルに行く前で終わっている。続きを書く計画があったとサルトルは語っているが、それは実現しなかった。ラ・ロシェル時代以降の検討は後にまわして、ここで『言葉』の中でとりわけ印象深いところに触れておきたい。

「不正乗車した私は、座席の上で眠りこんでいたら、車掌が私をゆり起こして、「切符は？」といった。切符など持っていないことを認めねばならなかった。その場で乗車賃を払うだけの金もなかった。……そこで私は、重要で秘密の理由によりディジョンに呼ばれていること、それはフランスの利害にかかわるばかりか、人類の利害にも関係するかもしれない理由であることを明らかにした。……車掌は沈黙を守っていた。私は説明をくり返した。私が話しつつけている限り、彼が私を降ろそうとしない確信があった。ディジョンにむけて私たちを運んで行く列車のなかで、私たちは向きあっていたが、一方は黙して語らず、他方はしゃべりやめない。列車、車掌、そして軽犯罪者、それが私であった」

上の引用箇所はいろいろ解釈できるだろう。私の解釈を以下に示したい。

黙して語らない車掌は読者であり、サルトルが話し続けるのは彼がものを書き続けることの比喩である。また無賃乗車は、自分が間違っこの世界に登場したという居心地の悪さ、あるいは自己の存在の根拠の無さをあらわす。無根拠な存在である自分がこの世界から退場させられないために、彼はものを書き続けるのである。

父親が生後まもなく死去し母方の実家にやっかいになっていたことが、サルトルの無賃乗車感覚の原因である、とするのが一般的な見方であろう。しかし筆者は、その原因よりも、無賃乗車感覚それ自体に注目する。

自己愛性人格（障害）をもつ人たちは、他者からの賞賛により尊大で傲慢な誇大自己を維持

している。なぜ彼らはそうするのか、あるいはそうせざるを得ないのか。誇大ではない自己、自己愛的でない自己、つまり普通の自己、他者と対等な関係を築ける自己、それを持ち合わせていないからである。自己が無いことにたいいての人間は耐えられないだろう。まやかしても自己愛的誇大自己を作り上げねばならない。

環境がサルトルの自己愛を増長させた、ということはもちろんあるが、彼は自分の無根拠性を埋め合わせるため、話し続けものを書き続け、注目を集め賞賛を浴び続けねばならなかった、ということもあるのではないか。

「切符など持ってはいない」という存在には自己愛を肥大させ強化する必然性があったと思われる。

6. お調子者

サルトルは、義父と折り合いが悪くラ・ロシュエルでは数々の挫折を経験し生涯最悪の期間だった、と回想している。晩年の1974年にボーヴォワールがおこなったサルトルへのインタビューが、『別れの儀式』^[16]に収録されている。その中からラ・ロシュエルに関する箇所を抜き出してみよう。

「ぼくは〔ラ・ロシュエルの〕リセに完全には所属していなかった、ぼくはパリ生れだったし、言葉使いや振舞などが級友たちとはちがっていたからね」

パリからの転校生でひとり浮きあがっていたサルトルは、なんとか級友たちの歓心を買おうとする。

「彼ら（級友たち：筆者註）に菓子類をおごるんだ。憶えているが、ぼくらはラ・ロシュエルの大きな菓子屋へ行き、母の金でパパを喰べたものだ」

ここで「母の金で」というのは、母の金を盗んで、ということである。

「ぼくをパリへ行かせた（ラ・ロシュエルからパリの学校に転校したことを指す：筆者註）一つの理由は、中学三年のときに、義父が母に渡していた金をぼくが盗んだからなんだ」

彼の悪童ぶりはまだまだある。

「たとえばラ・ロシュエルのリセに転入したとき、ぼくは言った、パリにいた頃は愛人がいて土曜と日曜には一緒に寝るためにホテルへ行ったものだ、と。とにかくぼくは12歳だったし、背丈も平均より少し低かったから、そんな話はむしろ滑稽だったにちがいない。ぼくがいじめられるようになったのは身から出た錆というべきなんだ、なぜならぼくは級友たちを驚かせ、彼らを讃嘆させたつもりでいたのだから」

サルトルは母親のメイドに頼んで愛人からのウソの手紙も書いてもらうが、すぐにばれた。「こうしたお調子者の性格は大人になっても変わらなかった」と、永野潤は評している^[13]。

このインタビューは、興味深い話が多い。ここでひとつあげれば、「4. シュヴァイツァー」

中広：ジャン＝ポール・サルトルに関する病跡学的試論
 —いわゆる「メスカリン事件」をめぐる自己愛の視点から—

の節で論じたこと、つまり自己愛性人格をもつ人である祖父がサルトルの自己愛を育てたことが、彼自身の口から語られる。

「ぼくは子供のころ、人々から頭がいいと度たび、そして誇張して言われた。その理由は、ぼくが祖父の孫であり、その祖父はじっさいにはそうではなかったのに自分を偉大な人間だと信じこんでいたからだ。それで、ぼくは自分のことを小さな王子様だと思ふようになった」

1920年ひとりパリにもどりエリート高校のアンリ四世校に通うが、それから状況は再び彼の自己愛を肥大させていく。

7. エコール・ノルマル・シュペリウール

1924年サルトルは、エコール・ノルマル・シュペリウール (École normale supérieure) に進学する。この特殊な大学を高等師範学校と訳すだけでは、たんなる教員養成校かと誤解されてしまう。だが「高等師範学校」という訳語が定着しているので、そう表記する。

それは超エリート校である。フランスの高等教育制度は、日本などとは発想から根本的に違う。必要なところを最小限、説明してみよう^[17]。

日本の大学は入学試験難易度の偏差値により順位付けされるが、原理的には一様な集合内でのランキングである。これに対してフランスには、グランド・ゼコール (grandes écoles) といわれる普通の大学より上級の一群がある。バカロレア (baccalauréat＝大学入学資格試験) に合格すれば通常どこかの国立大学に登録できるが、グランド・ゼコールはさらに2年間の準備課程修了後、入試選抜となる。

高等師範学校は1794年設立され、同年設立のエコール・ポリテクニク (École polytechnique) とともに、グランド・ゼコールのなかでも名門中の名門、難関中の難関である。高等師範学校には理科系と文科系があり、1890年の入学者数は文理合わせて46名、サルトルが入学した1924年文科は28名であった。21世紀現在の入学定員は理系文系各々およそ100名程度である。日本に比べ、いかに少数精鋭か分かると思う。また学生は見習い公務員として手当が支給される。

フランス国家に有用な人材を育成するという目的は明白であろう。平等を掲げてきた戦後日本の教育しか知らない者にとっては、腰を抜かすほどの選別、エリート主義である。高等師範学校の在校生と卒業生はノルマリアン (normalien) と呼ばれ、彼らが特権的な集団になるのも当然である。

サルトルには、この「特権的な集団」がピッタリだった。気の合った級友と徒党を組み、大きな顔をしていたという。サルトルの次世代に属する思想家ミシェル・フーコーも、厳しい受験戦争を勝ち抜き高等師範学校に入学したが、彼の気質はそこになじまず、精神的に不安定となり自殺未遂を起こすなどしている^[18]。対照的な二人である。

大学教授の道を目指すならば、高等師範学校を卒業するだけではだめで、さらにアグレガシオン（agrégation＝リセ lycée 以上の学校で教えることができる1級教員資格およびその試験のことであるが、大学教授資格（試験）と訳されることが多い）にパスしなければならない。これまた難関である。サルトルは、アグレガシオンに1928年周囲の予想に反して落第し、翌年一番の成績で合格した、との有名な逸話が残っている。ちなみにフーコーもアグレガシオンに、一度失敗した後、1951年合格している。

このようなシステムをくぐりぬけてきた人たちの多くが、エリート意識が強く自意識過剰であることは想像に難くない。もともとそういう傾向の人たちが、チャレンジし成功して、一層彼らのそういう傾向に拍車がかかるメカニズムになっている、と考えられる。サルトルに関して、それは自己愛を強化する制度であったと言えるであろう。

8. 奇妙な戦争

サルトルは、ノルマリアンとなり、アグレガシオンに一番で合格して、おおいに自己愛を満足させていたはずである。ところが、次のステップで急に調子が悪くなる。

アグレガシオン合格後、兵役を終え、教職に就く。海外のポストそれも日本行きを希望したが採用されず、1931年北フランスの港町ル・アーブルのリセに哲学の教師として赴任する。リセはだいたい日本の高等学校にあたる。思い描いていたのはほど遠い田舎教師になったのだ。サルトルは、1933年ドイツに一年間留学し、1937年パリに戻る。

当時の状況、特に彼の内面をうかがう資料として、『奇妙な戦争——戦中日記』^[19]がある。

第二次世界大戦初期1939年9月から1940年5月まで、宣戦布告にもかかわらずフランスとドイツの間で戦闘が皆無に近い状態であった。この奇妙な状況が「奇妙な戦争」と呼ばれる。サルトルも召集されたが、気象班に配属され、のんびりした平和な毎日を読書三昧と執筆で過ごしていた。『奇妙な戦争——戦中日記』は、この時期手帳に書きとめられた文章が公表されたものである。手帳は全部で15冊あったが、当初見つけていた5冊分がまず刊行された。内容は、自己の再検討や後の『存在と無』につながる哲学的考察などを含み、狭い意味での日記に限定されない。

9. 「三つの時代区分」

『奇妙な戦争——戦中日記』は記述に日付が入っている。1939年12月1日にまとまった過去の回想と分析があるので、引用しながら少し解説を加えよう。

「青年期の、また成人後の私の人生を、この観点から三つの時期に分けたとしても、真実にもとりはしないだろう。第一の時期は、1921年から1929年までで、これは楽観主義の時期、私

中広：ジャン＝ポール・サルトルに関する病跡学的試論
 ——いわゆる「メスカリン事件」をめぐる自己愛の視点から——

が「千人のソクラテス」であった時代だ」

「1921年から1929年まで」とは、最悪のラ・ロシェルから1920年パリに戻って以降、エリート高校アンリ四世校から高等師範学校を経てアグレガシオンに一番で合格する期間である。要するに、人生が順調にいていた頃である。

「孤独と絶望があり、激しい恋愛、壮大な企て、長々と続く痛ましい無名の時代があり（だが私は夢想の中でこの時代を陰険にも短縮した。その時代が終わるときに、あまり年をとりすぎていないようにだ）ついで栄光がさまざまな讃辞や愛情をひきつけてやってくる」

「そしてよく人が若きベルリオーズとか若きゲーテなどと言うように、自分が若きサルトルであることを強く意識していた」

「「きみはぼくを苦しめるが、最後に笑うものがよく笑うんだ。なぜって、ぼくは偉大なんだから。」

自己愛全開である。誇大な自己イメージを、あまりにも正直に書いていて、驚かされる。

ここまでが第一の時期で、次から第二の時期になる。

「私は、マルロオが『征服者』の中で語っているあの中国人と同じで、人生が一度かぎりであることを遅れて発見しつつあった。それに思い出すが、この文章を『征服者』の中で読んだとき、私はたわいない知的ゲームのような印象を受け、その真実味を感じとってはいなかった（それは1930年のことである）。この真実味を本当に感じとったのは、そののち、31年、32年、33年になってからにすぎなかった」

1933年9月からベルリンに行くが、「31年、32年、33年」というと、彼はル・アープルで田舎の高校教師として失意の、面白くない日々を送っていた。

「私はだんだん狭くなっていく道に足を踏み入れているという感じを非常に強く抱き、一歩進むごとに、ちょうど髪の毛を失うように自分の可能性の一つが失われてゆくと感じていた。その髪の毛だが、私はもう失い始めていた」

DSM-IV-TRは「自己愛性人格障害をもつ人は、加齢とともに避けられない肉体的、職業的限界の出現に適応することが特に困難である」と、テキストで述べている。DSMのこの文章は、当時の彼を見事に言い当てている。

「要するに私は、壮年への移行がこの上なく耐え難かったのだ。32歳で私は自分がひどい年寄りだと感じていた。私が自分に約束していたあの偉大な人間の生涯はなんと遠くに行ってしまったことか。おまけに私は、自分の書くものにそれほど満足していなかった。それに、書いたものをできれば活字にしてもらいたいと思っていた」

サルトル32歳は1937年にあたるが、当時、最初の小説は出版社に拒否され、第二作『メランコリア』（『嘔吐』と改題され1938年出版される）はまだ手を入れる必要があり完成していなかった。想像力に関する哲学的著作はその序論の第一部（『想像力』1936年刊行）が出版社に採用されたきりで、彼がはるかに強い関心をもっていた本論に当たるべき第二部は当分刊行の見

込がなかった。

「[28歳で名をなさなかつた者は永久に栄光を断念しなければならない]。もちろんまったくもって馬鹿げた文章だが、これが私を恐怖のどん底に沈めたのである。ところで28歳になっても私はまだ無名だった。何一つまともなものを書いていなかった……」

自伝的作品『言葉』にあるように、サルトルは作家になって名声を得るという夢を年少の頃より抱いていた。ノルマリアンで哲学教授の大著作家を夢みる誇大自己は危機に瀕していた。

「私は1年間のヴァカンスをとってベルリンですごし、そこで青年時代の無責任を再発見した。それから帰ってきて、ル・アールでの教師生活にまたつかまってしまった。たぶんそれ以前よりももっと苦い思いを味わいながら」

次にいよいよメスカリン事件が出てくる。

「以上のことはすべて、その年の3月に（ボーヴォワールによるとメスカリンの実験は2月となっている：筆者註）狂気へと転じたあの奇妙な不機嫌によって——またつまるどころオルガとの出会いによって終わった」

「というわけで、人生は一回かぎりのものだったのに、私に与えられたのはこうしたねばねばしたやり損ないの生だった——それは私が夢想していたかの「偉大な人間の生涯」とは実に実かけ離れていた」

「狂気とオルガに対する恋情の時期、私は最低の状態にあった。2年間、1935年の3月から1937年の3月までだ」

オルガとの関係はサルトルが望んだようには進展しなかった模様である。

ここで「狂気」の期間について、ボーヴォワールの『女ざかり』には1935年夏休みの出来事として、次のような記述がある。

「アーケードに囲まれた広場に降り立った時、サルトルは藪から棒に、もう気が狂っていることにはうんざりした、といった。この旅行中、彼は伊勢エビの群につきまといわされていたのだ。その晩彼は、エビどもを決定的に追い払うつもりだといった」

ボーヴォワールは「サルトルは全快した」と言っているのだが、それより後でこうも書いている。

「ふたりして（サルトルとオルガ：筆者註）エビどもをまいてやるあの散歩には、わくわくするような詩的な味があった」

ボーヴォワールの書き方は日時を同定しづらいが、これはやはり矛盾している。全快宣言にもかかわらず、サルトルの症状は1935年夏以降も続いていたのではないか。伊勢エビに追いかけまわされていた（この表現が誤解を生むことは後ほど触れる）期間がいつまでか、はっきりしない。しかし「最低の状態にあった」のは、彼自身が言っているように、パリのサン＝タンヌ精神病院におけるメスカリンの実験以降「2年間、1935年の3月から1937年の3月まで」と考えておきたい。

中広：ジャン＝ポール・サルトルに関する病跡学的試論
 ——いわゆる「メスカリン事件」をめぐる自己愛の視点から——

「そして、ちょうどこの時期、最低の状態で——あまりにもみじめで、何度も平然と死を思ったほどだった——自分はもう年寄りで、落ちぶれて、お終いだ、と感じ、『嘔吐』も NRF (La Nouvelle Revue Française＝ガリマール出版社が発行する文芸雑誌：筆者註) から断わられたばかりだしと——誤解して——思い込んでいたそのときに、すべてが私にほほえみはじめたのだった。私の作品は採用され、『壁』が37年6月の NRF に載り、ワンダとも知り合い、またパリの学校に転勤することになった。私は、にわかに湧きあがるすばらしい若さに浸された。私は幸福だった。私の人生は美しいと思った」

第二の時期から「すべてが私にほほえみはじめ」第三の時期になったのである。そして戦争をはさんで、サルトルの黄金時代となっていく。

10. 誇大自己の崩壊

『奇妙な戦争——戦中日記』では臆面もなく本音を吐いているが、彼は正直者なのか、1938年出版された『嘔吐』が既に話題となり注目を集めていたので自己愛がさらに増長されていたのか。

いずれにせよ、サルトルが非常に自己愛の強い人物であったことは明らかであろう。しかし「自己愛性人格をもつ人」とするには、その定義上、DSM の自己愛性人格障害の診断基準を満たすことが必要である^[6]。一瞥しただけで少なくとも診断基準項目^[12]の5つを満たすが、全体把握を重んじ、診断基準のどの項目を満たすか逐一詳細に確認する作業はやめておく。なぜなら、DSM の自己愛性人格障害に反映されている現代の精神医学における自己愛の概念には合意するが、診断手技として要素的な項目をリストアップする DSM 流の操作的診断に賛成しているわけではないからである。

サルトルが精神科を受診したとの証言や記録は残っていないが、明らかな精神医学的症状を呈しているので、「自己愛性人格をもつ人」から「自己愛性人格障害をもつ人」になったとしてよい。「明らかな精神医学的症状」とは、サン＝タンヌ精神病院におけるメスカリンの実験以後起こってきたもの、彼自身が「狂気」と称しているものを指す。

自己愛性人格をもつ人は、うまくいっているときはよいが、困難な現実と直面し破綻すると、種々の精神医学的症状を呈する。

サルトルは先に見たごとく、生涯最悪の期間だったラ・ロシェルよりパリに帰ってから、幼少期より育まれた自己愛がいよいよ強化された。ところが1931年ル・アブルのリセに赴任して、急速に困難な現実、つまり年をとること、にもかかわらず彼が夢想していた「偉大な人間の生涯」とかけ離れほとんど著作がないこと、そのような現実と投げ込まれる。彼の誇大自己はまさに危機状態となった。おそらくほんのちょっとしたきっかけで壊れてしまうような瀬戸際のところまで来ていたように思われる。きっかけが何であれ、誇大自己の崩壊は時間の問題

だったかもしれない。

サルトルにとって甲殻類は大嫌いな恐ろしいものであり、「体の両脇といわず背後といわず、蟹だの蛸だの、奇妙なものが、うようよと這いまわった」幻覚は、彼を恐怖のどん底に陥れたと想像される。

西洋の哲学は理性に特権的地位を与え理性が世界を正しく認識すると考える。西洋の哲学者サルトルもそう考えたはずである。幻覚は世界を誤って認識したものだから、理性の麻痺である。理性の麻痺は狂気につながる。それは理性を具えるべき者にとって自己の存在を根底から揺るがす大事である。このような事情から、幻覚に、狂気に、彼は尋常ならざる恐怖を抱いたのではないか。幻覚や狂気は完璧なる理性を有する哲学者という自己愛的なイメージを壊すのに十分であろう。

メスカリンによる幻覚体験と狂気への恐怖が引き金となって、既に危機状態にあったのが全面的に崩壊した結果、精神医学的症状が出現したと考えられる。

ボーヴォワールによると、サルトルはうつ状態に陥った。彼自身の回想を再度引用すると、「ちょうどこの時期、最低の状態で——あまりにもみじめで、何度も平然と死を思ったほどだった——自分はもう年寄りで、落ちぶれて、お終いだ、と感じ」ていた。このよううつ状態は自己愛性人格障害において最もよく見られる症状である。

1937年を境に状況が好転する。

「すべてが私にほほえみはじめたのだった。私の作品は採用され、『壁』が37年6月の NRF に載り、ワンダとも知り合い、またパリの学校に転勤することになった」

著作が公刊され、恋人ができ、田舎を脱出し、すべてがうまくいき、彼の自己愛が再び満たされる。

「私は、にわかに湧きあがるすばらしい若さに浸された。私は幸福だった。私の人生は美しいと思った」

このようにして1935年3月から1937年3月までの「狂気」と「最低の状態」が終わったとするのであれば、症状とその原因の時間的な相関性は明白である。原因となった現実の困難さが取り除かれると、彼に成功が訪れると、症状は消退した。

11. 伊勢エビの襲撃

サルトルが呈した症状のうち、うつ状態は自己愛という視点から整合性をもって説明できる。問題となるのは「伊勢エビの幻覚」とされるものである。

幻覚とは実在しないものを感じることである。感覚は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五つあるから、それらに対して各々幻覚が考えられる。例えば、光がないのに光があると感じて実際にはないものが見えると視覚における幻覚すなわち幻視であり、音がないのに音が聞こえ

るのが聴覚における幻覚、幻聴である。

「うしろから伊勢エビがひよこひよこついてくる」とボーヴォワールが書いているのを、「うしろから伊勢エビがついてくる幻覚」とするのが一般的であった。サン＝タンヌ病院でのメスカリンの実験で生じた甲殻類の幻覚がフラッシュバックしたと理解するのである。またサルトルは、自分の病気を“*psychose hallucinatoire chronique*（慢性の幻覚の精神病）”と言っていた。フランス文学研究者が、甲殻類の襲撃におびえ続けた彼の症状を「伊勢エビの幻覚」とするのも無理からぬ話である。しかし幻覚とすると、それは「うしろから伊勢エビがひよこひよこついてくる」のが見えた幻覚、つまり幻視である。メスカリンによる異常体験のフラッシュバックならば、幻視が出現することもありえる。

フラッシュバック説以外の可能性を考えるとすれば、どうだろう。フラッシュバックでないとすると、幻視という症状は、てんかんの一部や長期過剰飲酒の中断時、中毒性（ある種の物質が脳に作用する）あるいは器質性（脳の神経細胞が変性・崩壊する）精神疾患以外では稀である。どれもサルトルに当てはまらない。

彼が伊勢エビに追いかけまわされていたのは確かである。だがボーヴォワールやサルトルが書いているのを注意深く読むと、彼らは決して伊勢エビが見えたとは言っていない。伊勢エビの追跡とは「うしろから伊勢エビがひよこひよこついてくる」という妄想だったのではないか（精神医学用語としての妄想とは、その人だけが信じて疑わずどんなに合理的に説明しても訂正されない誤った考えをいう）。

幻視が非常に稀な症状であるのに対し、精神科領域において妄想はありふれている。精神科医の筆者は、人間という存在はいとも簡単に理性的判断から外れて妄想を抱く、との印象を持つ。伊勢エビがついてくるという妄想はあえて分類すれば追跡妄想であるが、その例ならいくらでもあげられる。某国のスパイ組織につけねらわれ行く先々で尾行される、などはよくある典型的パターンで、さらに襲われ拉致されるとなれば、被害妄想といえよう（追跡妄想は、追いかけて患者が困り苦しむので、被害妄想に入れてよい）。

妄想の内容が伊勢エビにまつわるものだったことは、ある程度心理的に追うことができるかもしれない。心理的な因果関連として、サルトルが甲殻類が大嫌いであったことや、メスカリンの実験による幻覚（幻視）において甲殻類が出現したことが、可能性として考えられる。

次に自己愛性人格障害において誇大自己が崩壊したとき妄想が生じるかどうか、検討してみよう。

12. 神経症レベルと精神病レベル

精神医学には、病態を神経症レベルとより重症である精神病レベルに分ける区分法があり、妄想は精神病レベルに属する。

自己愛性人格障害の大多数の症例は神経症レベルであり、精神病レベルにまでいたるのは例外と考えられる。その例外の具体的な症例を提示するかわりに、ここでは DSM-IV-TR の短期精神病性障害 (Brief Psychotic Disorder) の項にあるテキストを引用しよう。

「病前から存在する人格障害 (例：妄想性、演技性、自己愛性、分裂病性、あるいは境界性人格障害) が、この障害 (短期精神病性障害：筆者註) を発現させる素因となることがある」

「人格障害をもつ者の中には、心理社会的ストレス因子によって短期間の精神病性症状を起こす者がある」

DSM はこの短期精神病性障害の症状として、(1)妄想 (2)幻覚 (3)解体した会話 (例：頻繁な脱線または減裂) (4)ひどく解体したまたは緊張病性の行動 をあげているが、これらは精神病レベルに相当する。

上記 DSM の文章を流用すると、自己愛性人格障害をもつ者の中には、心理社会的ストレス因子によって短期間の精神病性症状を起こす者があるが、サルトルもそのひとりだった、となるろう。

ただし診断基準には「B. 障害のエピソードの持続期間は少なくとも 1 日以上 1 カ月未満で、最終的には病前の機能レベルにまで完全に回復すること」という条件が付いており、サルトルの症状は 1 カ月以上続いたので、彼の病態は DSM の短期精神病性障害には当てはまらない。DSM を持ち出したのは、自己愛性人格障害から精神病レベルに達する症例が存在していることを示すためである。さらに DSM にこだわるなら、症状の項目(2)幻覚 が生じてもいいのだが、サルトルの場合、幻覚ならば幻視となってしまう、臨床的事実からそれは極めて稀であることは既に述べたとおりである。

自己愛性人格障害が DSM に取り入れられたのは 1980 年の DSM-III からだが、その DSM-III では自己愛性人格障害のテキストの中で、自己愛性人格障害に併発する可能性のある疾患として「短期反応性精神病などの精神病性疾患 (psychotic disorders such as Brief Reactive Psychosis)」があげられていた。自己愛性人格障害が DSM に登場した時から、自己愛性人格障害をもつ人が精神病レベルの症状を起こすことがある、と言われていたのである。

上述のごとく、自己愛性人格障害の大多数の症例は神経症レベルである。妄想という症状は精神病レベルに属するから、自己愛性人格障害において妄想を呈する症例は圧倒的に少数派といえる。精神科医の近藤三男は、自己愛性人格障害において「救われることのない不運や挫折に際して代償不全が生じ妄想性障害に至ることがある。……しかし、短期間に現実検討が精神病に至るほど損なわれることはまれであり、妄想性障害はよほど苛酷な状況下にあるとき、あるいは転移 (精神療法における治療者と患者の関係のひとつ：筆者註) の中で危機が生じたときにのみ生じると考えた方がよい」としている^[20]。

サルトルの直面した現実がとりわけ過酷だったとは言えないだろう。アグレガシオン合格後、リセの教師になるのは一般的なコースであるし、赴任先は大都会に限らずフランス中どこでも

中広：ジャン＝ポール・サルトルに関する病跡学的試論
 ——いわゆる「メスカリン事件」をめぐる自己愛の視点から——

ありうる。彼が投げ込まれたのは、ごく平凡な現実である。その平凡な現実と、ゲーテなみに天才と自任するサルトルが「夢想していた、かの「偉大な人間の生涯」とは、実に実にかけて離れていた」。現実と自己イメージのギャップがあまりにも大きすぎたのだ。彼は誇大すぎたともいえる。それゆえ例外的に精神病レベルに陥ったのではないか。

13. 恋人への手紙

伊勢エビの追跡や襲撃を妄想と考えることは、筆者が見ることのできた文献の範囲で、サルトルやボーヴォワールの記述と矛盾しない。それどころか、伊勢エビ追跡妄想説を補強してくれそうな文献が存在する。それは、ボーヴォワールが編纂したサルトルの書簡集 [21] に収められているルイズ・ヴェドゥリーヌ宛の手紙で、日付は1939年8月土曜となっている（下の引用のカッコ内は原文）。

「ぼくの恋人

……きょう夕方また、例の一キロ遠泳をやった。だが、五〇〇メートルほど行ったところ〈獣〉がこわくなった。これは話したことがあるね。水の底に住む例の恐ろしい獣だ。それが巨大な蟹のようなはさみを持ち上げて、その十二対の足の方へぼくを引き寄せせるのではないかと想像するのだ (J' imagine que ……)。それでぼくは〈獣〉から逃れるために、また自分から逃れるために、全速力で、プロペラ運動にたよって、五〇〇メートルを泳いで帰ってくる。その結果が見事なスコア。強迫観念 (l'obsession) のことは心配しないでいいよ。これは半信半疑 (c'est du demi-cru)、一種の精神衰弱患者 (psychasthéniques) の思い込み (croyances) なのだから。それにしてもこれはしつこい。ぼくが海にひとりしているとやってくる。それ以外はやってこない。……」

これを、サルトルが「水の底に住む例の恐ろしい獣」を見た、とはできないだろう。「……と想像するのだ」とあるように、あくまで思考内容である。彼が言う「狂気の時期」における「伊勢エビの襲撃」も実はこれと同様だったのではないか。そうであれば「伊勢エビの襲撃」とは、伊勢エビが襲撃してくるのを見たのではなくそれに襲撃されるという考えであり、幻視ではなく妄想である。

ただしこの手紙にある「強迫観念」は「半信半疑、一種の精神衰弱患者の思い込み」とされており、訂正不能なまでに信じていたのでないから（精神医学用語としての）妄想ではない。

「それにしてもこれはしつこい」

確かにしつこいが、サルトル自身がこう書いているのは、正常かつ客観的な判断ができているからであろう。手紙の時期は1939年8月であり、1935年3月から1937年3月までの「狂気」と「最低の状態」から抜け出た後なので、彼の精神は元に戻っていたはずである。ゆえに、水の底に恐怖を持ってそれが妄想にいたっていないと考えられる。

14. 「あの不安」

『奇妙な戦争——戦中日記』の1940年3月13日に、フラッシュバックと思われる記述が出てくる。

「三月十三日 水曜

私の気分に変な転換が生じた。昨日の六時ごろ、私の眼は突然ゆらめき、半ば消えたようになった。私は十五分のあいだ、空っぽになって苛々として不安な時を過ごした。一九三五年に狂気に違いないと思ったあの不安だ。やがてそんな状態が消えたが、夜はぐったりとしたままだった。それなのに今朝、目覚めたときは幸福だった。……」

DSM-IV-TRのコード番号292.89幻覚剤持続性知覚障害（フラッシュバック）は、症状を知覚の障害に限定している。サルトルに再現したのは知覚症状ではなく過去に経験した不安なので、DSMの幻覚剤持続性知覚障害（フラッシュバック）には該当しない。「フラッシュバック」を一般的な意味、即ち「突然過去に戻る」という意味で使うならば、これは「一九三五年に狂気に違いないと思ったあの不安」のフラッシュバックである。

不安を、あの不安、この不安と峻別できるか、という疑問は残るが、サルトルが主観的に「あの不安だ」と思ったのは事実である。このような不安のフラッシュバックが1940年に初めて起こったのか、それ以前、1935年3月から1937年3月までの「狂気」と「最低の状態」の期間にも起こっていたのか、証言や記録資料がないので不明である。いずれにせよフラッシュバックしたのは不安であり、1940年に伊勢エビは登場しない。

メスカリン・フラッシュバック説に沿って、ちょっと考えてみよう。その説によると、1935年から1937年のフラッシュバックは、幻覚のフラッシュバックである。幻覚とともに「狂気に違いないと思ったあの不安」もフラッシュバックしていたかもしれない。1940年になると病状が改善し、幻覚のフラッシュバックはなくなり、不安だけがフラッシュバックするようになった。この推論に無理はない。

1935年から1937年の間も幻覚はフラッシュバックせず「あの不安」だけがフラッシュバックした、と仮定するとどうだろう。これは実は、ラガッシュ・ボーヴォワール説とマッチングがよい。サルトルが「一九三五年に狂気に違いないと思った」ことは、既述のように「完璧なる理性を有する哲学者という自己愛的なイメージを壊すのに十分であろう」から、それを契機に精神医学的症状、うつ状態と伊勢エビの妄想が生じたと考えられる。1935—1937年には、「狂気に違いないと思ったあの不安」のフラッシュバックは、症状を維持・強化する方向に働いたのであろう。状況が好転しすべてがうまくいき、彼の自己愛が再び満たされると、1940年3月13日付記載のように、フラッシュバックした時はぐったりしても、すぐ翌日回復したのである。

15. おわりに

最終的にまとめると、ここで試みたラガッシュ・ボーヴォワール説でもサルトルの症状を説明できる。また文献資料と矛盾しない。一流の精神科医であったラガッシュ博士と長年サルトルに連れ添いサルトルをよく知るボーヴォワールが言っていたこと、即ちサルトルを悩ました症状はメスカリン実験による幻覚のフラッシュバック（幻覚剤使用時の体験が幻覚剤なしでも再現すること）ではないとの仮説は、定説ではなく従来省みられてこなかったが、彼ら二人は無根拠で唐突無形なことを言っていない。定説のメスカリン・フラッシュバック説以外も考えられる。

その定説ではない仮説（本稿で「ラガッシュ・ボーヴォワール説」と仮に名付けた説）が自己愛の視点を設定すれば整合性があることが、本研究により明らかになったと思われる。学問研究において定説以外の可能性を考へてみることは、新たな地平を切り開くことにつながるかもしれない意味あることではないだろうか。

文 献

- [1] 中広全延：「セルジュ・チェリビダッケ、その関係の様式」 日本病跡学雑誌 60；73-81, 2000
- [2] 中広全延：「セルジュ・チェリビダッケとカルロス・クライバーの病跡学的比較検討」 夙川学院短期大学研究紀要 26；51-63, 2002
- [3] 中広全延：「小澤征爾、24歳の「ホームシックという奇妙な病気」について」 日本病跡学雑誌 62；103, 2001
- [4] 中広全延：「自己愛性人格障害の診断基準の有効性について、指揮者フォン・カラヤンをめぐって」 精神神経学雑誌 106；304-310, 2004
- [5] 中広全延：「カラヤンの閉じた目」 日本病跡学雑誌 70；60-69, 2005
- [6] 中広全延：『カラヤンはなぜ目を閉じるのか——精神科医から診た“自己愛”』 新潮社 2008
- [7] 中広全延：「現代のナルシズム」に関する研究ノート」 夙川学院短期大学研究紀要 35；47-52, 2007
- [8] 中広全延：「サルトルと視覚」 日本病跡学雑誌 67；91, 2004
- [9] 中広全延：「サルトルのメスカリン事件」 日本病跡学雑誌 69；85, 2005
- [10] 中広全延：「サルトルの病跡学的研究（その3）、ミシェル・フーコーとの関連で」 日本病跡学雑誌 71；95-96, 2006

- [11] ボーヴォワール、シモーヌ・ド（朝吹登水子・二宮フサ 訳）：『女ざかり——ある女の回想2』 紀伊國屋書店 1963 (La force de l'âge, Gallimard, 1960)
- [12] American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision; DSM-IV-TR. American Psychiatric Association, Washington D.C., 2000. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 訳：『DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル』 医学書院 2002)
- [13] 永野潤：『図解雑学 サルトル』 ナツメ社 2003
- [14] サルトル、ジャン＝ポール（白井浩司・永井旦 訳）：『言葉』 人文書院 1967
- [15] 高橋正雄：「偉大なる祖父（第11報）サルトル」日本病跡学雑誌 64；67-70, 2002
- [16] ボーヴォワール、シモーヌ・ド（朝吹三吉・二宮フサ・海老坂武 訳）：『別れの儀式』 人文書院 1983
- [17] 柏倉康夫：『エリートをつくり方——グランド・ゼコールの社会学』 筑摩書房 1996
- [18] 桜井哲夫：『フーコー——知と権力』 講談社 1996
- [19] サルトル、ジャン＝ポール（海老坂武・石崎晴己・西永良成 訳）：『奇妙な戦争——戦中日記』 人文書院 1985
- [20] 近藤三男：「自己愛型人格障害の症候学」精神科治療学 10；1223-1229, 1995.
- [21] サルトル、ジャン＝ポール（朝吹三吉・二宮フサ・海老坂武 訳）：『女たちへの手紙 サルトル書簡集 I』 人文書院 1985 (Lettres au Castor et à quelques autres 1926-1939, Gallimard, 1983)